

「統合自我」の亀裂

— 「エマ」「ジェイン・エア」「ジュード」に見る十九世紀的「自我」の変容

大熊 榮

1. はじめに

この小論の目的はサルマン・ルシュディが指摘した十九世紀の「統合自我」から二十世紀のポストコロニアル的「複合自我」への自我の変容を跡づける作業の一環として、ジェイン・オースティンの『エマ』(1815)、シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』(1847)、トマス・ハーディの『ジュード』(1895)に見られる十九世紀的「自我」の変容を調べることにある。

この小論で言う「自我」とは社会的に作られるものであるが¹⁾、「自我作り」(Self-Fashioning)についてはすでにグリーンブラット(1980)があり、トマス・モアからシェイクスピアまでのルネサンス期の自我の作り方とその意味が研究されている。われわれの研究に重要な指針を与えてくれると思われるこの本の「序文」について、ここで詳しく見ておきたい。

「私の主題はモアからシェイクスピアまでの『自我の作り方』(Self-Fashioning)である。その出発点は単純なもので、16世紀イギリスには作りうるものとしての自我と分別があったということにある。もちろん明白なことをこれほど大胆に明言することは、どこかしらばかげている。結局のところ、個人的秩序感覚、世間に対処する特徴的方法、および束縛された欲望の構造としての自我は、常に存在するのであり、アイデンティティの形成と表現には常になにがしかの意図的作成要素が見られるものだからである」(Greenblatt, 1)

グリーンブラットはこのように始める。むしろ「自我作り」は16世紀以前からもチョーサーなどにその兆候が見られるが、重要なことは「アイデンティティ生成を支配する知的社会的心理的審美的構造の変化」(Greenblatt, 1)が近世初期に生じたという事実だと、グリーンブラットは指摘する。この複雑な変

化を「自我作り」に引き付けて要約すると、「操作可能で人工的なプロセスとしての人間的アイデンティティ作りに関する自意識」(Greenblatt, 2)が強まったということである。キリスト教世界ではこの種の「自意識」は禁じられていた。「自分の自我を作ろうとすれば、身の破滅だ」(Greenblatt, 2)という聖アウグスティヌスの言葉が長く影響力を保っていた。「自我作り」への「自意識」は「身の破滅」への覚悟でもあったわけである。

しかし、16世紀の詩人たちは好んで「破滅」へ向かおうとしたわけではなく、「キリストに倣うこと」からの離反に伴う応分の不安を抱えつつ、表現面で新たな意味の領域を開発する。「マナーと物腰」に結びついた領域である。自我作りを意識した文学作品は、「紳士を作る」ために書かれたスペンサーの『フェアリー・クィーン』のように、エリートに「マナーと物腰」を教えるという機能を持ちはじめた。「自我作りは文学と社会生活の明瞭な区別をものともせず機能するという、まさにその点に面白さがある。文学的登場人物の創作、自己のアイデンティティの形成、自己の管理外にある力によって造型される経験、他者の自我を形成する試みなど、さまざまな境界を自我作りは否応なく越えていく」(Greenblatt, 3)とグリーンブラットは言う。

「自我作り」の意味はエリートの教育から、エリートによる社会支配のための補完物となっていく。ここでグリーンブラットはクリフォード・ギアーツの『文化の解釈』から文化の定義を援用し、その一部を担う「行動統轄のための支配メカニズム」という概念によって「自我作り」の最も深遠な意味を規定する。「自我作りはこれらの支配メカニズムのルネサンス・ヴァージョンであり、抽象的潜在的なものから具体的歴史的具現への通路を統轄することによって特定個人を創造する、意味の文化システムである」(Greenblatt, 3)

要するに「自我」は文化的産物であり、文学はそのことの表象という見方がここにある。この見方の中で文学には互いに入り組んだ三通りの役割がある。まず、「個別作家による具体的行動の表明」(Greenblatt, 4)という役割で、作家がこの役割に固執すれば自伝文学になるし、読者が解釈をこの面に限定すると、伝記的研究になるが、これはいずれも、もっと大きな「意味のネットワーク」を見逃すことになる。第二に、「行動が形成されるコードそのものの表現」という役割だが、これはイデオロギー小説に見られるように「イデオロギー的上部構造に完全に吸収される危険」(Greenblatt, 4)を抱えている。第三に、「コードへの省察」という役割。この場合、モダニストに見られるように、作家は社会から距離を置くことで「個人や制度との関係での芸術の具体的役割」

を極端に減らすことになり、社会は「歴史的背景」へと追いやられてしまう (Greenblatt, 4)。

グリーンブラットは彼自身の批評的立場として、これら三つのどれにも偏らず、「意味のネットワーク」や「個人や制度との関係」を重視する。ギアーツのような文化批評家や人類学者との共通の地盤を求める彼にとって、文学とは「所与の文化を構成する記号システムの一部」であり、文学研究の目的は「文化の詩学」構築である (Greenblatt, 4-5)。

このようにして、文学は社会と密接に関わるべきものだという立場から、グリーンブラットは「自我作り」の社会的・政治的意味を解き明かしたと言ってもいい。しかし、彼の議論の核心には支配・被支配の概念が横たわり、論理を単純にしている向きもある。「自我作り」は「抽象的潜在的なものから具体的歴史的具現への通路を統轄することによって特定個人を創造する、意味の文化システムである」という彼の見方は、「自我作り」が「システム」という名の「制度」に関与することを示唆するものだが、しかしその現象は支配・被支配の関係からのみ生じるのではなく、その点をサムナーが『フォークウェイズ』で示している「制度」の概念によって中和する必要があるだろう。サムナーは「制度」を「漸次成長する制度」と「制定された制度」とに分け、前者についてこう述べている。

「財産や結婚や宗教というのは、もっとも本源的な制度である。それらはフォークウェイズに始まった。それらは慣習となった。それらは、未熟なものとはいえ、ある種の生活の福祉という理念を加えることでモーレスに発展した。そしてそれらは、ルールや決められた行為や用いられる装置にかんして、より明確に、明細に作られた。これらが構造を作りだし、制度は完全なものとなったのである」(Sumner, 71)

つまり「自我作り」と社会との関係は「抽象的潜在的なものから具体的歴史的具現への通路の統轄」に加えて、「漸次成長する制度」への貢献という側面もあることに注目すべきなのである。

とはいえ、「自我作り」が十六世紀において「マナーと物腰」に結びつく新しい表現領域を生み、「紳士作り」の文学をもたらししたというグリーンブラットの指摘は、十八世紀末の作家ジェイン・オースティンの作品のルーツを知らしめているし、彼が引用している「自分の自我を作ろうとすれば、身の破滅だ」

という聖アウグスティヌスの言葉は『ジェイン・エア』にこそ当てはまると思わせるものがあり、十八世紀末から十九世紀にかけての文学を論じようとしているわれわれにとってのグリーンブラットの言説の重要さは不変である。

これまで見てきたグリーンブラットの議論は「個人的秩序感覚、世間に対処する特徴的方法、および束縛された欲望の構造としての自我」という作業定義に基づいている。この定義はおそらくG・H・ミードの「いかなる自我も社会的自我である」という命題を排除するものではない。ミードの「社会的自我」は「自己意識的自我」と「性格」から成る。前者が「言葉の十全な意味での自我」であり、後者は「単なる習慣の組織としての自我」である。「社会的自我」の考えはデカルトに始まる主体的自我やフロイトの言う心理的プロセスが発生する場とも異なり、どちらかと言えばサルトルの実存的自我に近い。いずれにせよ、デリダのようなポスト・フロイト的自我論から見れば、われわれは古典的一般心理学の自我論という範疇で作業していることになるだろう。

2. 「エマ」——「統合自我」のモデル

『エマ』は「淑女作り」の小説である。中流階級に生まれ、美貌と知性に恵まれた若い女に「マナーと物腰」を教えるという役割をみごとに果たしている。しかしこれは礼儀作法書ではないので、作者は主人公に明示的に教え込むという方法を取らず、悟らせるという方法を取る。そのために作者は物語の構造を必要としたのである。

物語構造の骨格は時間的にできている。物語はある年の九月二十八日に始まり翌年十一月で終わる。その間にエマの「自我作り」が完成し、彼女は「淑女」となる。

十五ヶ月の時間は三部に分割され、ほぼ四ヶ月毎に区切られている。最後だけは六ヶ月に及ぶが、物語の实质は四ヶ月で終わっている。九月二十八日からクリスマスを含み、翌年一月中旬までが第一部である。ここでのクライマックスはエルトンによるエマへの求愛にある。続く第二部は四月まででフランク・チャーチルとジェイン・フェアファックスがハイペリーへやってきてエマの「自我」に影響を与える。第三部は五月から十一月までだが、フランクとジェインの秘密婚約やミスター・ナイトリーのエマに対する愛の告白など、主要な出来事は八月までで終わる。残りの三ヶ月は言わばエピローグで、ハリエット

とロバート・マーティンおよびエマとミスター・ナイトリーの結婚が手短かに報告されるだけである。

この十五ヶ月をエマの「自我作り」に焦点を合せて見ていくと、最初の一、二ヶ月は二十一歳のエマの自覚されない欠点が浮き彫りになる。裕福な地主の家に生まれ、母親が死んで、姉イザベラが結婚した後は、召し使いたちの差配を含む家の管理を任されてきて、「あまりにも自分の思い通りにできる力」(Austen, 7) が備わっていることが欠点につながる。彼女に欠点を気づかせるものはだれもない。父親ミスター・ウッドハウスは娘の教育に無頓着で、五歳からずっと傍にいる育ての親にして家庭教師(ガヴァネス)のミス・ティラーは、結局使用人であるがゆえに、エマに注意できない。「少し自分のことをよく思いすぎる性質」(Austen, 7) もミス・ティラーの欠点である。「育ち」と「性質」とが否定的にであれ彼女の「自我」を形成してきたわけである。この「不完全な自我」は他者への偏見によってさらに劣化する。農夫ロバート・マーティンを「きわめて劣った生きもの」(Austen, 29) と断定する偏見であり、彼女がこれを偏見と悟るには一年ほどの時間を必要とする。

冒頭でのエマの「自我」は外部的に、とりわけその「育ち」によって、形成されているわけだが、この「育ち」は階級という、特に制定されたものでなく、徐々に成長してきた「制度」のネットワークの中にある。彼女の「自我」は「制度」によって形成されたのである。

彼女の「不完全自我」は物語展開の要因となる。「制度」のフィルターからエマの判断力へと浸透してきた「対等」原理がハリエットとロバート・マーティンの「非対等」な恋を壊し、「対等」を理由にこの十七歳の少女を牧師エルトンに結びつけようとするが、ミスマッチとなる。ここでは社会に根を下ろした階級「制度」と人間の自然な感情の対立が見て取れる。物語の展開としては、ハリエットがロバート・マーティンと結婚し、人間的感情の勝利で終わるのだが、しかし感情の抑制は「制度」の要請であり、エルトンのように感情を剥き出しにすることはその要請、言い換えれば「マナー」に反することになる。

提示された「不完全自我」の完全化がこの小説のテーマであり、そのためには「完全自我」のモデルが必要である。ミスター・ナイトリーがその役割を担っている。彼が描く完璧な「紳士」とは「分別」と「適切なマナー」と「周囲への配慮」を備えた人間であり、そのような人間は常に正しく行動し、「自分を高める」ことができるとともに、他人から「敬意」「愛情」「信頼」を勝ち得ることもできる (Austen, 122)。

このナイトリーはエマの教育係となる。「ミスター・ナイトリーはエマの欠点を見抜くことができる数少ないひとの一人だったし、欠点を彼女に告げることのできる唯一の人間だった」(Austen, 11)という彼の役割規定が冒頭でなされている。彼はまずロバート・マーティンに対するエマの偏見を叱り、むりなマッチメイキング(具体的にはハリエットとエルトンの引き合わせ)についても批判する。ただし、この教育的効果がエマの「自我作り」に及ぶには時間がかかる。

第二部になると、エマの「自我作り」は少しずつ進展する。ロバート・マーティンに対する見方の変化が生じるのである。エルトンとの関係で傷ついたハリエットがフォードというウール生地店で偶然ロバート・マーティンとその妹エリザベスに出会い、その時のことをエマに報告する場面がある(第二部三章)。「マーティンさんがとても気持ちよくとても親切に振舞うのを見てなんとなくうれしくなった」というハリエットの言葉に、エマは必ずしも賛同できない。しかしロバート・マーティンに対して「哀れみ」の気持ちを覚える。彼が「愛だけでなく野心も成就できなかったから」というのがエマの「哀れみ」の理由である(ちなみに「野心」とはハリエットととの結婚によって期待される社会的身分の上昇である)。ここには階級「制度」によって不完全にされた判断が示されているが、しかし蔑視の態度は消えている。ミスター・ナイトリーの教育のささやかな成果である。

第一部でエマへの感情を露にして「紳士」の資格を疑われたエルトンはしばらく滞在していたバースから婚約者オーガスタ・ホーキンを連れてハイベリーへ舞い戻る。オーガスタは成金の娘であり、「淑女」の規範から外れた行為振舞いでエマの反面教師となると同時に、社会構造に変化を生じさせつつある新しい富裕階級の「自我」を象徴する。その意味で脇役ながら重要な人物である。エマは彼女を「世界中のだれよりも賢く機知に富んだものになりたいと思っている」人物と見る(Austen, 237)。欲望が肥大した「自我」のモデルであり、その不調和は現代的とさえ言える。

結婚祝賀パーティ出席者への返礼訪問として、オーガスタとエルトンがウッドハウス家を訪れる場面では、チャーチル夫人(フランク・チャーチルの叔母、ミスター・ウェストンの前妻の姉)は「成り上がり」だということが話題になる(第二部十八章)。ここで展開されるオーガスタの「成り上がり」論には彼女自身の「自我作り」がつぶさに見て取れる。

「ほんとうに、考えただけでも無性に腹立たしいですわ！私は成り上がりの例をぞっとするほど知っていますの。メイプル・グローヴでその種の人たちをもうほんとうにうんざりするほど経験しました。近所に一軒の家がありまして、その家の人たちとよしたら、醸し出す雰囲気のために私の兄や姉がさんざん迷惑を受けていますのよ！ミスター・ウェストン、あなたがいますがたなざったチャーチル夫人のお話を聞いて、私はすぐにその人たちのことを思い浮かべました。つい最近そこへ引っ越してこられたタップマンという名前のご家族ですの。下層の親戚がたくさんいらっしやって、それを重荷に感じているのですけれど、ご自分たちはとても気位が高くていらっしやるのよ。昔からの家柄のご家族とお付き合いしたくてたまりませんの。ウェスト・ホールに住んでまだせいぜい一年半にすぎませんし、いったいあの人たちがどこで富を築いたのかはだれも知りません。パーミンガムから移ってこられたかたたちですけど、ご承知のように、あそこはあまりいいことがありそうな街ではありませんでしょう、ミスター・ウェストン。パーミンガムにあまり大きな希望は持てませんわ。パーミンガムと聞いただけで私はいつもなにか恐ろしいような気になりますの。でも、タップマン家については、いいことはなにも聞こえてこない代わりに、胡散臭いことでしたらもういくらでもありますのよ。それだと言うのに、あの人たちのマナーとよしたら、私の兄のミスター・サックリングとさえ対等だと間違いなく思い込んでいるのですからね。兄はたまたまあの人たちのすぐ近所に住んでいるものの一人なものですから。もう、これ以上悪いことはありませんわ。ミスター・サックリングはメイプル・グローヴに住んでもう十一年になりますし、それに父の代から所有していた家ですの。ええ、少なくとも私はそう思っていますわ。父は亡くなる前に購入を完了していたはずだと思います。ええ、きつとたぶんそうだったと思いますの」

(Austen, 255)

このスピーチの最後の部分でオーガスタは急に自信をなくしている。つまり彼女自身も「成り上がり」にすぎないことに思い至るかのようなのである。居住期間の長さが十一年でその土地の名門とならないのは、一年半がそうならないのと変わらない。この引用から窺がえるのは、思い上がりと蔑視、虚栄心と競争心が「成り上がり」的思考の原理を構成し、それが「自我作り」へ影響しているようすである。この時代の理想は「制度」への順応に基づく「統合され

た自我」にあり、それに相応しい「マナー」のシステムがあるのだが、オーガスタの「マナー」つまりはここでの話し方とその内容ほど「紳士」や「淑女」に必要なものとして容認されたシステムから遠いものはなく、もともと「上流」の人々から冷ややかに見られるしかない。「制度」の中で「成り上がり」という欠点の補完はありえないことを認めようとせず、手前味噌な「淑女」を気取るオーガスタはある意味で『ジェイン・エア』の主人公にも似た「反逆者」であり、それまででない新たな「自我作り」のひとつのモデルと言える。

第二部に新たに登場するもう一人の女ジェイン・フェアファックスはオーガスタとは正反対の若い「淑女」の鑑であって、エマに羨望の念を掻き立てさせる。それというのも、ミスター・ナイトリーが口をきわめてジェインを褒めるからである。「彼女の感受性は強いと思う。それに気質は寛容、辛抱強さ、克己心などがとてもすばらしい」(Austen, 237)この褒め言葉はグリーンブラットの言う「意味の文化システム」から濾過されて出てきたものであり、エマの「自我作り」に影響を与えずにはおかない。ジョージ・ナイトリーはジェインを褒めることでエマに「制度」側からの欠点補正要請を暗示しているわけである。

しかし「淑女」の鑑のように見えるジェイン・フェアファックスも、ある日、雨の中を郵便局まで歩いて行ってくるのをジョン・ナイトリー(ジョージの弟)に目撃されるに及び、周囲の男たちに驚きを与える。「若い淑女はデリケートな植物」とか「若い淑女はよくよく保護されないといけない」(Austen, 241)というミスター・ウッドハウス(エマの父親)の意見はジェインの「自我」を「淑女」の枠に封じ込めようとする作用を持つ。行動は大胆でも、ジェインは『ジェイン・エア』の主人公のように「制度化」された「淑女」の枠を破って出ていく勇気を持たない。むしろ、ジョージ・ナイトリーによって「開放的な」気質を指摘される(Austen, 237)エマのほうが「制度」を飛び出す可能性を秘めている。

実際、第三部ではエマの感情が問題となる。それが問題となるような筋の運びが用意されていて、そのためにジェイン・フェアファックスとフランク・チャーチルが第二部で登場したのである。エマと同年輩の二人は婚約をしているながら、秘密にしている。フランクが叔母の財産を相続するのに有利にことを運ぶためである。秘密を知らないエマに対して、ジェインは「淑女」に必要な忍耐心の見本となり、フランクは感情抑制教育の反面教師となる。つまり彼はエマに気があるようなそぶりを見せ、エマの感情を掻き立て、一時は二人と

も本気で恋をしているような気分になる。その一部始終をジェインは嫉妬心を抑え、じっと耐えて見守るのである。一方、ミスター・ナイトリーから見ると、エマの行動は品を欠き、「淑女」にふさわしくないと映る。

まずは舞踏会の場面(第三部二章)でフランクはエマに言い寄るふりをする。次いでボックス・ヒルへのピクニックの場面(同六章)では、人目を憚らない二人の「いちゃつき」(flirtation) (Austen, 304)へと発展する。

「全員が腰を下ろすと、状況はましになった。エマの好みからすると、はるかにましになった。というのも、フランク・チャーチルがエマを第一目標にして、能弁になり、陽気になったからだ。示しうるあらゆる明確な関心を彼女に向けたのだった。彼女を楽しませ、彼女の目に心地よく映ろうとすることにすべての神経を注いでいた。エマのほうも元気よく声をかけられればうれしかったし、おだてられて悪い気はしなかったので、陽気に気楽に振舞った。彼の言い寄りを親密ぶって励まし、容認した。もっともこうした奨励は知り合って最初の頃の最も活気づいていた時期にすでにしていたことだった。しかしいまやそれは彼女自身の判断ではなんの意味もないものだった。とはいえ二人のようすを目撃した大半の人たちの判断では、英語のフラーテーション(いちゃつき)という言葉が最もよくそれを説明するような印象を与えていたに違いない。『フランク・チャーチルさんとミス・ウッドハウスはいっしょに度を越していちゃついていた』と見えただろう。彼らは自ら進んでそういう表現の餌食になっていたのだ。そういう表現を含む手紙が一人の女性によってメイブル・グローヴへ、また別の女性によってアイルランドへ送られてもおかしくない事態だった。エマがなにかほんものの至福を味わいつつ陽気になり分別を失っていたというわけではない。むしろ原因は彼女が予期していたより楽しくないことにあった。失望していたがゆえに笑いさざめいたのだ。フランクに注目されることはうれしかったし、親しげにしてであれ、褒め称えようとしてであれ、あるいはふざけようとしてであれ、彼の目は常にひどくまじめだと思ったけれども、その目は彼女の心を取り戻すには至らなかった。彼女はまだ彼とは友だちのままにいるつもりだった」(Austen, 303-4)

この一節はエマの内面と表面的行動の不一致を記録している。内面では感情を抑制しようとしているが(「友だちのままにいるつもり」)、行動は「いちゃ

つき」になっている。正確には、そういう「表現の餌食」になっているのである。これは「自我」の「表現」でもあり、ここには「統合された自我」は存在せず、むしろ「自我」は分裂の危機に直面している。いつ何時エマが「淑女」という「制度」の枠を飛び出してもおかしくない状態である。

この不安定な心的状態に曝された直後にエマはミス・ベイツの心を傷つける発言をする。退屈なおしゃべりを飽きることなくするオールド・ミスへのからかいを口にするのである。この件では、エマはすぐにミスター・ナイトリーから叱責を受ける。彼女は叱られて驚くが、すぐに反省するわけではない。時間をかけ、徐々に反省し、悔い改める。このようにして彼女はいやなことにも我慢する寛容さを身につけ、「自我」をより完全なものへ近づける。

彼女の「自我作り」が完成するのは、しかしながら、フランク・チャーチルによってもたらされた「自我」分裂の危機を克服するまで待たなければならない。その時は複雑な経路を経てやってくる。フランクの叔母ミセス・チャーチルが死に、遺産の相続が確実になった段階で、彼はジェインとの秘密の婚約を明るみに出す。これが一つの経路である。もう一つは舞踏会に溯り、一人取り残されていたハリエットにミスター・ナイトリーが救いの手を差し伸べる時に始まる。ハリエットはナイトリーに恋心を覚え、それをエマに告白する。この瞬間のエマの反応は次のようである。

「ミスター・ナイトリーとハリエット・スミス！彼女の側の途轍もない品位上昇！彼の側の途轍もない品位低下！世間の評判で彼の品位がいかの下がるかを考え、この組み合わせが彼を犠牲にして促進する笑い、冷笑、浮かれ騒ぎを予見すると、エマはぞっとした。彼の兄が感じる屈辱と軽蔑。彼自身が蒙る無数の不便。そんなことがあっていいのだろうか。いや、あってはならない」(340)

つまりその最も重大な瞬間にエマの中でグリーンブラット＝ギアーツの言う「行動統轄のための支配メカニズム」が作動したことが分かる。「世間の評判」(the general opinion)や対等原理という社会の規範が彼女を動かすのである。

その一方で彼女はハリエットに「行動統轄のための支配メカニズム」を教え込もうとしてきたことを思い出す。

「自分以外のだれがハリエットに自尊心の概念を教えただろうか。自分以

外のいっただれが彼女に、可能ならば自分を高めるべきだと教えただろうか」(340)

こうしてエマは最後まで矛盾を抱え込む。ハリエットを犠牲にしなければナイトリーの名誉は守れないのである。しかしこの矛盾もナイトリーの取り計らいで止揚される。彼はロンドンでハリエットとロバート・マーティンを再度引き合わせ、結婚を取り持つのである(第三部十八章)。

心配の種が取り除かれ、エマとナイトリーは結婚する。エマの側から見てこの結婚の意味は、「行動統轄のための支配メカニズム」(対等原理, 自尊心, 向上心)の確認作業であるとともに、マナーの面での欠点の改善による「自我作り」の成就ということでもある。ナイトリーは「彼女をよくしようと努力しつつ、彼女が正しい道を外れはしないかと心配しつつ、子供の頃から彼女を見守ってきた」(Austen, 341)のであり、彼女のほうもようやく「間違い」(faults)を自覚するに至ったからである。しかも「自分のあらゆる間違いにもかかわらず、自分が彼にとって大切な存在なのだと彼女は知った」(Austen, 341)という覚醒によって、彼女はもはや内面と行動の分裂を経験することはない。こうして彼女はナイトリーとともに「統合自我」のモデルとなる。

3. 『ジェイン・エア』——「統合自我」の亀裂

『ジェイン・エア』におけるきわめて深遠な探求は、実際、小説にとって新しいものであって、『自我の暗い深淵』に差し込むそのような持続的光線を持つ作品は、未だかつてなかった」(Tillotson, 260-1)

ティロットソンが言うように『ジェイン・エア』におけるシャーロット・ブロンテほどに「自我」とその形成にこだわった作家が彼女以前にいただろうか。確かにジェイン・オースティンは「統合自我」のモデルを提供しているけれども、それは「行動統轄のための支配メカニズム」や社会に受容されている「制度」への順応を意味するのであって、『エマ』が「自我」にこだわった作品だとは言えない。それはなんら疑いを知らない善男善女の世界である。とりわけ信仰という「制度」に関しては、牧師エルトンを含むどの登場人物もそれを「自我作り」に取り込む気配がない。それは空気のように当然そこに存在するものなのである。これに加えて、財産が主な目当ての結婚相手探しに夢中になるば

かりのエルトンの世俗性は信者という羊を導く牧師の名にほとんど値しない。これは『驕慢と偏見』の牧師ウィリアム・コリンズについても言える。彼らは宗教「制度」の形骸化、形式化を象徴しているのである。言わば墮落したこの「制度」を疑い、その枠を飛び出すのが「ジェイン・エア」の主人公ということになる。「制度」の従順な受容が「統合自我」の前提条件であるとすれば、「制度」への真剣な懐疑は「統合自我」の亀裂を意味する。

「ジェイン・エア」は制定されたものでない「制度」としての宗教が十九世紀において重大な変質と遂げつつあったことの証拠でもある。エルトン、コリンズに加え、『ジェイン・エア』のプロックルハースト牧師もまた宗教「制度」の変質と墮落を印象づけるために作られている。彼は宗教の名を借りた圧政者で、慈善事業の学校を経営しながら、無慈悲で厳格な禁欲を生徒や先生に押しつけるけれども、それは信仰の向上といった「行動管轄のための支配メカニズム」を作動させてのことであるよりも、経費を節約して私腹を肥やすためであり、事実自分の娘や妻には贅沢を許している。

彼は時々監視のためにローウッド・スクールへやってきては、生徒をうるさく叱り、罰を与える。十歳のジェインは義理の叔母リード夫人によってこの学校へ遺棄されるのだが、彼女の入学後三週間ほどしたある日、プロックルハーストが学校へやってくる。その日はまず、昼食にパンとチーズを出したことで、善良なテンプル先生を批判し、学校の教育目標を確認させる。

「よろしいかな、先生！ここにいる少女たちを育てる私の計画は、贅沢や奢侈の習慣に慣れさせることでなく、艱難に耐えられる克己心を養うことなんですぞ。先生もよく知っていると思いますかね。料理が生煮えだったり煮えすぎだったりして、たまたま少し食欲不振になり、食事を取らないというようなことがあってもすな、その埋め合わせになにかもっとおいしいもので空腹を満たしてやり、そのことで肉体を甘やかし、この学校の目的を骨抜きにするようなことは、あってはならないのです。むしろその機会を生徒の精神的啓発に活かし、一時的窮乏のもとで不屈の精神を発揮するように奨励すべきではないのですかな。(中略)まったくもってすな、先生、焦げたポリッジの代わりにパンとチーズを子供たちの口へ入れたことによって、なるほど悪しき肉体を養うことはできるかも知らん。しかしすな、そのことで子供たちの不滅の魂をいかに飢えさせてしまうかを、先生はほとんど考えておりませんな！」(J.E. = Jane Eyre, 63)

このようにブロックルハーストは肉体を極端に罪悪視し、耐乏精神の養成を強調する。耐乏精神は「餓えた四十年代」に見合う標語として、ある程度の現実味をもっていたと考えられる。だが、肉体の罪悪視は、宗教「制度」が形骸化している現実の中では、だれの目にも時代遅れの考えと映っていたに違いない。そのことを強調するような場面がブロックルハーストの説教の後に続く。ブロックルハーストは年長の生徒たちの髪型に難癖をつけ、「三つ編みの髪」(top-knots)を切るように命令する。「私の任務はこの生徒たちの中にある肉体の欲望を抑制することだ」と彼は言うが、皮肉なことにその直後に、着飾った妻と娘たちが彼を訪ねてくる。

「彼女らはもう少し早く来て、彼の衣服に関する講義を聞くべきだった。というのも、ビロードやシルクや毛皮ですばらしく着飾っていたからだ。三人の訪問者のうち若い二人（十六、七歳のすてきな娘たち）は当時流行のグレイのビーバーハットを被り、その帽子にオストリッチの羽根を飾り、この優雅なヘッドドレスの縁の下からは入念にカールした豊かな長い髪が垂れていた。年上の娘はアーミンで縁取りされた高価なビロードのショールをはおり、フレンチカールのヘアピースを前髪につけていた」(J.E., 64)

この一連の場面がブロックルハーストの偽善を暴くために描かれていることは明らかである。この偽善は、しかし、ブロックルハースト個人の問題ではなく、おそらく宗教「制度」の問題として提示されているものと思われる。作者は牧師の娘であり、聖職者の世界の内情に通じていたという伝記的事実も、この推測の補強証拠となる。信仰に関心がないわけではないシャーロット・ブロンテのような作家が宗教「制度」の形骸化と腐敗を目の当たりにした場合、もはや「制度」を通じての信仰の追究という道は考えられず、個人的追究へと傾斜したとしても不思議はない。作者自身の宗教にかかわるこのような「自我作り」はもう一人の聖職者セント・ジョン・リヴァーズの造型に最も鮮明に反映されている。

この人物はジェインが聖ヨハネの荒野の試練にも似た餓死寸前の経験をして倒れているところへ登場し、彼女を救って自宅へ招き入れる。このことがあってジェインは彼を命の恩人と思うようになり、やがて彼に求婚された時に、人間味のない、もっぱら宗教的理由による求婚であるにもかかわらず、なかなか断りきれない原因となる。セント・ジョンはジェインにとっての個人的救世主

なのである。宗教を媒介とした二人の関係のほかに、物語はもっと複雑な縁戚関係を用意している。それによって二人は「いとこ」同士であることが判明するわけだが、この血縁は、そのほかの血縁と同様、寓意的で、ジェインにおける宗教的なもの、宗教にかかわる「自我作り」を表象する。セント・ジョンは、真摯に個人的に信仰を追い求めはじめたジェインが、エドワード・ロチェスターと結婚しなければそうなっていたかも知れない姿なのである。

セント・ジョンは年齢が二十八歳から三十歳で、モートン教区の牧師を勤めながら、農民の子弟教育にも力を入れ、慈善学校を経営している。そして新たに開設する女子校の先生としてジェインを迎えようとする。スポンサーはオリヴァーという地元の実業家で、その娘ロザモンドはセント・ジョンに恋をしている。オリヴァー家は世俗的なものの表象であり、セント・ジョンがロザモンドに多少気持ちを播さぶられるのは、まだ世俗へのつながりを断ち切れないからである。しかし彼の「自我作り」は超俗へと向かう。宣教師としてインドへ行く気持ちをしだいに固めつつある。偶然目の前に現れたジェインは彼の決断を早める要因となるが、しかし最終決断の前に、ジェインの能力を試そうとする。彼女に学校教師の仕事を依頼するのはテストの一環であり、さらにはヒンドゥスターニ語をも学ばせる。そうした準備を経て、セント・ジョンはジェインに結婚とインド行きの承諾を迫る。もちろんその前に精神的準備も怠らない。ロザモンドへの気持ちの整理も進める。ロザモンドが宣教師の妻に向かないことを見極めた上で、彼女への未練は「弱点」だと考える。

「確かにぼくはミス・オリヴァーの前で顔を赤らめたり震えたりするけど、自分を哀れんだりはしない。ぼくは弱点を軽蔑する。下劣だと思う。単なる肉体の熱病にすぎない。断言するが、決して魂の痙攣なんかではないんだ。決意は岩のように固いし、荒れ狂う海の中でもしっかりと海の底に沈んでいる。ぼくはぼくであるところのもの、冷たく固い人間だということを知って欲しい (Know me to be what I am …… a cold, hard man) 」(J. E., 375)

引用の最後の文はジェインに提示されたセント・ジョンの「自我」である。それは徐々に作られてきた「自我」であって、例えば神によって作られたわけではない。宣教師となってインドへ行くことは、「召命」といったものでなく、彼自身の選択なのである。彼の場合、宗教が明らかに個人化されている。

「簡単に言えば、キリスト教が人間の歪みを隠すために着せる血塗られた法衣を脱ぎ捨て、ぼくは自分の原初状態に戻って、冷たく固い野心的人間となっている。すべての感情の中で自然な愛情のみがぼくを支配する永遠の力を持っているんだ。感情でなく理性がぼくの道案内だし、ぼくの野心は無限だ。もっともっと向上したいとか、他人よりもたくさんのことをしてほしいという欲求は際限がない。ぼくは忍耐、堅忍、勤勉、才能に敬意を表す。それらは人間が偉大な目的を達成し、高邁な卓越へと上昇する手段だからだ」(J.E., 375)

このセント・ジョンの言葉には形骸化した宗教「制度」への批判が含まれている。「キリスト教が人間の歪みを隠すために着せる血塗られた法衣を脱ぎ捨て」とあるのがそれで、これを聞いたジェインは「異端の哲学者みたいね」と感想を述べる。するとセント・ジョンはこう反駁する。

「いや、ぼくと理神論的哲学者との間には決定的な違いがある。ぼくには信仰がある。福音を信じている。異端というのは見当外れだね。ぼくは異端でなく、キリスト教の哲学者だ。イエス宗派の追隨者なんだ。イエスの弟子として、ぼくは彼の純粋で、慈悲深く、優しい教義を受け容れる。ぼくはそれを擁護するし、それを普及させると誓っている。若くしてぼくが身を委ねた宗教がぼくの原初の資質をここまで培ってくれたんだ。自然の愛情という微細な胚芽から博愛という鬱蒼と繁る樹木を育ててくれたし、人間的愚直さという野性の細い根から、神の正義という適切な分別を育ててくれた。そして、ぼくの惨めな自我に力と名声をもたらそうとする野心から、主の王国を広め、十字架の旗印に勝利をもたらそうという野心を引き出してくれたというわけだ。宗教はそれだけのことをぼくにしてくれた。原材料を最良の資質へと変えてくれたし、自然を刈り込み、訓練してくれたが、しかし自然を根絶することはできなかった。この限りある命が不滅の相を帯びるまでは、自然の根絶はむりだろうね」(J.E., 375-376)

これはまさにセント・ジョンにおける「自我作り」の手順説明である。エマの場合のように「世間の評判」などはこの手順に関与しない。関与するのは「福音」すなわち「宗教」であり、これが錬金術におけるエリクシル（錬金薬液）のように「自然＝本性」を変容させ、聖なるものにする。セント・ジョンのこ

の言明が「福音主義」⁽²⁾の影響下にあるということや、ヘレン・バーンズの信仰に似ているということよりも、「自我作り」の出発点に「自然＝本性」が位置していることのほうが、われわれにとってより重要である。それはここで「原初の状態」(my original state)あるいは「原初の資質」(my original qualities)と呼ばれている。そこには「自然の愛情」(natural affection)「人間的愚直さ」(human uprightness)「力と名声への野心」(the ambition to win power and renown)が含まれが、当然これらのものはジェインにもある。そういう「原初の状態」からどういう人間になっていくかというのが二人に共通の課題であり、神に頼るか、人間中心で進むかの岐路が待ち構えている。ジェインは後者の道を選び、セント・ジョンは前者の道を歩んで「自我」を作っていくのだが、「自我作り」が個人の責任に任せられ、集団が関与しないところに、『エマ』の世界とは異なる特徴がある。

ジェインは神に頼らず、人間に固執して「自我作り」を始める。ティロットソンが「自我の深淵」と呼んだものは、ジェインの「原初の資質」と関係があるかも知れない。「自伝」と銘打ったこの小説は回想形式で書かれていて、作品の最終章から推察するとジェインは現在三十歳と考えられる。彼女は五年前にヘレン・バーンズの墓を訪れ、草に覆われた塚しかないのを見たが、その後「RESURGAM (われ甦らん)」と刻まれた大理石の墓碑銘を建てている(第1部9章末尾)。彼女が二十年前の自分を回想する時、そこに見出すのは世間的基準からすると劣った「資質」である。育ての親リード夫人が表象する「行動管轄のための支配メカニズム」から外れた「資質」だ。四歳年上の従兄弟ジョン・リードと喧嘩し、憤激のあまり相手に怪我をさせる。「自分の手がなにをしたのか自分でもよく分からない」(J.E., 11)とジェインは回想する。つまり肉体とそれを統轄する意志が連動せず、自分の感情が抑えられない少女として登場するわけである。言葉も意志と関係なく飛び出す。

「『リード叔父さんが生きていたら、叔母さんになんて言うかしら』と私は意志とほとんど関係のない質問をした。意志とほとんど関係がない、というのは、自分の意志がその発話に同意することなしに、舌が勝手にその言葉を発音したかのように思えたからだ。自分でコントロールできないにかが自分から言葉となって出て行ったのだった」(J.E., 27)

これは「上品」を旨とする他者から見ると「狂い猫」(J.E., 12, 27)と映る。

さらに、ローウッド・スクールへ「収容」される前のブロックルハーストとの面接では、「おまえには邪悪な心が宿っている」(J.E., 33)と言われる。このようにジェインは「狂気」や「邪悪さ」という反社会的「資質」を抱えて十歳からの「自我作り」に乗り出す。『エマ』のような「正気」の世界と正反対の世界が拓けつつあることが分かる。エマがヒロインであるとすれば、ジェインはアンチヒロインなのだ。

『ジェイン・エア』はアンチヒロインがヒロインになるまでの物語と要約できる。罅割れた「自我」がなんとか縫い合わされる物語とも言えるが、われわれからすると罅割れた「自我」の部分のほうが興味深い。この罅割れの原因を作者はどう考えているのだろうか。すでに触れた二つのケースからすると、意志でコントロールできない「狂気」にその原因を求めているようであるが、実はその後にジェインは「狂気」の発作と呼べるような振舞いをする事が出来ない。彼女が発作的と言えるような行動に及ぶ場合があっても、その原因はたいてい社会的、外部的なのである。冒頭でジェインの「狂気」に触れるのは、後に狂女バーサ・ロチェスターを登場させる布石であろうし、バーサの「狂気」は「結婚」という「制度」が当時孕んでいた社会的矛盾の表象なのである。

従兄弟との喧嘩が原因で「レッドルーム」という恐ろしい部屋に監禁されるジェインは鏡に自分の顔を写し、「反逆した奴隷」(J.E., 14)と自己規定する。ジェインが「奴隷」であるかどうかについてはジーナ・ポリティからの異論がある。つまり作品全体で「奴隷」についての十回の言及が行われるが、ジェインが最後に手にする富が奴隷売買からの収益であることは忘れられているという異論である¹⁰⁾。従ってわれわれもジェインを「奴隷」になぞらえることはやめるが、「反逆」のほうは明らかにジェインの行動の特質になっている。「反逆」は三分野にわたっている。「制度」としての「教育」「結婚」「宗教」である。

ローウッドでの学校体験および教育経験、ソーンフィールド・ホールでの家庭教師経験、モートンでの慈善教育経験などがジェインと教育の関わりだが、彼女の「反逆」や反発が明白なのはローウッド・スクールでの最初の半年ほどの期間である。この間に彼女が自ら育むのは正義感で、これは本来であれば「制度」の側が「学校」という道具を使ってジェインに教え込むべき道徳律であるにもかかわらず、経営者ブロックルハーストは偽善家である上に、ジェインに対して「嘘つき」(J.E., 66)という虚偽の申し立てをする。この濡れ衣を晴らすプロセスの中で、ジェインは正義感を育むのである。もっとも彼女はひとりですら反証を行うわけではなく、良心的な校長ミス・テンブルの力を借りる。ミス・

テンブルが教育「制度」の側にいる人であることを考慮すると、「制度」の懐は深く、ジェインはまったくそこから出てしまうわけにいかない。現に彼女はその後六年間生徒として留まり、さらに二年間は「制度」の側に立って教育をも行う。「反逆」と言えば、教員の職を擲ってガヴァネスへ転じることがそれに当たるかも知れないが、教員と言っても「モニター制度」⁴⁾でのモニター（監督生）であり、無料奉仕に近いわけで、むしろガヴァネスのほうがましだったのである。

ローウッドでの八年間でジェインが最も影響を受けたのはミス・テンブルの教えである。「私が修得したものの最良の部分は先生の教えのおかげだと思う」とジェインは述懐する。

「私は先生の本性のいくぶんかと習慣の大部分とを吸収した。より調和の取れた考えや程よく抑制された感情などが私の心の住人になった。義務と秩序への忠誠心を受け容れ、私はおとなしくなった。自分が満足していると信じた。訓練され抑制された性格の持主というふうにならぬに常に他人の目には映ったし、自分の目にさえそう映った」(J.E., 84)

G・H・ミードによれば「性格」は「自我」の一部であり、変りにくいものとされているが⁵⁾、ジェインの「性格」は変わったのである。彼女の「自我作り」は明らかに「制度」順応の方向へ動いた。では「反逆」はどこへ行ったのだろうか。微細に観察してみると、彼女はローウッドでの「生活」(existence)に必ずしも満足していなかったことが判明する。

「私の世界はここ何年もローウッドにあり、私の経験は学校の規則とシステムに関してのことばかりだった。ところがいまふと思い出したのは、世界は広く、さまざまな分野の希望や恐れ、感情や興奮が、危険の中で人生の真の知識を求めて世界の広がりの中へ出て行く勇気のあるものを待ち受けているということだった」(J.E., 84-85)

「学校の規則、学校の義務、学校の習慣、観念、声、顔、言葉遣い、風習、好き嫌い。そのようなものが生活 (existence) から私が知ったことがらだ。ところがいま、それでは十分でないと感じている。ある日の午後、私は八年間の決まりきった生活 (routine) が嫌になった。私は自由が欲しかった。自由に恋焦がれた。自由のために祈りさえした。祈りはその時軽

く吹いていた風に乗ってどこかへ飛んで行ってしまったように思えた。私は自由を諦め、もっと慎ましやかな神頼みをすることにした。この哀願も漠然とした空間へ飛ばされてしまったようだった。『それならば』と私は半ば自暴自棄になって叫んだ。『せめて新しい苦役 (servitude) を私にください』(J.E., 85)

このように彼女は自由を抑圧するものへの反発心を抱えている。それは単にローウッドに表象される学校「制度」に限らず、階級「制度」をも含んでいる。彼女がエマのような階級の出身ならば「自由が欲しい」と叫んだりしない。彼女がローウッドを去って取り組むのは階級の壁への挑戦である。

それにしても、この作品ではローウッド時代のジェインの「自我作り」が多面的に分析されている。まず「性格」の面で大変化が生じていることが分かるし、「生活」面での「自我」への影響も観察されている。これに加えて「自由への希求」は「自己意識的自我」(ミード) そのものである。ジェインは「自我作り」に新たな局面を与えるためにソーンフィールドへ行くと言ってもいいかも知れない。

ソーンフィールドでの最初の経験は、しかしながら「教育」であって、ジェインに興味を覚えさせるものではない。具体的にはバイリンガル教育である。生徒のアデルは生まれも育ちもフランスで、しかもソーンフィールドへはつい最近きたばかりとあって、英語がよく話せない。いきおい主にフランス語がジェインとアデルの間のコミュニケーションの道具となる。シャーロット・ブロンテは『教授』の中で若いウィリアム・クリムズワースをベルギーのブリュッセルへ送り込み、英語とラテン語の先生をさせる。彼が生徒たちと行う会話はしばしばフランス語になり、テキストもフランス語のままである。『ジェイン・エア』においてもジェインとアデルの会話はしばしばフランス語で行われ、外国語を知らないミス・フェアファックスを困らせる。逆にアデルの乳母ソフィーはフランス語しか話せない。当主のロチェスターはフランスでの磊落な生活が長く、当然フランス語に堪能で、アデルとはもとより、時にはジェインともフランス語で話す。ジェインがフランス語を話さなければならない機会は豊富なのである。このようにして彼女にとってソーンフィールド・ホールはミニフランスとなる。これはもちろん彼女が想定していなかった状況だが、作者は先刻承知のはずで、『教授』においてクリムズワースを将来の展望があまりないままブリュッセルへ乗り込ませたように、ジェインにもソーン

フィールド・ホールというある種の外国へ先方の事情がよく分からないまま行かせたと考えられる。『教授』では評判の悪かったフランス語圏でのロマンスという構想をソーンフィールドに密かに持ち込んだ動機はシャーロット・ブロンテにおけるフランス文化への憧れにほかならないが、その憧れのなながしがジェインに植えつけられていて、擬似的フランス語環境が彼女の飢えをある程度満たし、ガヴァネスとなって最初の三ヶ月を彼女は至って満足しながら過ごすのである。

その間の経験を回顧する際、ジェインは自分が普通のガヴァネスでないという自負を示す。まず、「子供の天使的本性についての厳肅な教義」(J.E., 108)を信じないし、「その教育に責任を持たされたものが子供のために偶像崇拝的献身を考える義務」(J.E., 108)があるとも思わない。「親のエゴティズムにおもねる」(J.E., 108)気持ちはさらさらないのである。そのためジェインはアデルを手厳しく見る。「彼女には大した才能はなく、これと目立つ性格の特徴もなく、感覚や好みも子供たちの平均的レベルを一寸でも越えるような特別な発達は見られない。とはいえ、彼女には平均的レベルよりも下回る立場に立たせるような欠点や悪癖もなかった」(J.E., 108)という具合である。一方でジェインは自らの教育的手腕を信じ、自分に任されて以来のアデルが「顕著な進歩をした」(J.E., 108)と教育成果を評価する。彼女は自信家なのであって、アデルに対し「行動管轄のための支配メカニズム」そのものとなる。少女の知識教育のみならず、躰から行動の管理に至るまで、すべてを差配し、ことアデルに関しては時に「主人」のロチェスターにさえ異議を唱える。彼女の「自我」を特徴づける「反逆者」的本性は革命の国フランスを模したソーンフィールドで、ある程度の自由を獲得し、教育的専制君主を生むとともに階級の越境者をも育てるのである。

その後モートンの慈善学校で農民の子女二十人を前に教師として立つ時(第3部5章)、時間的にはソーンフィールドを出て半年ほどしか経っていないにもかかわらず、ジェインはもはや支配者側の人間以外のなにもでもない。しかも、突然現れた血族の遺産が転がり込み、「成り上がり」の中産階級として「独立」を達成する。それまで考えられなかったような「自由」が手に入り、「自由で誠実な村の学校教師」を続けることもできれば、ロチェスターの「情婦」となってマルセイユあたりで住むこともできるし、セント・ジョンの妻となってインドへ宣教に出かけることもできるのである。このような状態になっていっそうジェインの「自我作り」の特色が鮮明になる。根強い階級越境志向

があるため、あばら屋で「粗末な衣服を着た小さな小作人たち」(J.E., 359)に教える「村の学校教師」という立場を惨めに思うのだが、ジェインはそう思う自己を戒める。

「周囲に見聞きするものすべての無知，貧困，粗末さに，私は困惑し，気弱になった。しかし，そういう気持ちになる自分をあまり憎んだり軽蔑したりしないことにしよう。そういう気持ちになるのは間違いだと分かっているし，それが分かったことは大きな一歩を踏み出したことなのだ。そういう気持ちの克服に努めよう」(J.E., 359)

ジェインの「自我作り」はまさに弁証法的に進む。弱い立場にある時は強いものに反発し，対等な立場へ引き摺り下ろそうとするし，強い立場になると，弱い立場のものに同情し，対等者へ引き上げようとするのである。この「自我作り」を貫いているのは平等・博愛の原理にはかなならない。「自我作り」がグリーンブラットの言う「意味の文化システム」を反映しているとすれば，ジェインのそれには明らかにフランス革命が影響しているのである。

「結婚」分野でのジェインの「反逆」は「独立」の前と後でその内容を異にしている。独立前にあっては階級「制度」への反発が中心にあり，また「制度」としての結婚に付随する旧弊な観念の打破にも執念を燃やすが，独立後は「神への愛」か「人間への愛」かという形而上学的問題が中心にきて，いわば「神への反逆」が試みられるとともに，「宗教」が前面に出てくる。

ジェインがロチェスターに惹かれる下地として「フランス鼯鼠」的なものへの密かな遺伝子操作を見逃すことはできない。彼女がなにも知らずにガヴァネスとして赴任するソーンフィールド・ホールは意外にもミニフランスであり，馬に乗って現れる「主人」は，イギリス支配階級の一員に組み込まれていながらも，支配階級の価値体系を体現せず，むしろ主にパリで奔放な生活を送る無頼漢であり，フランス的な雰囲気を漂わせている。ジェインがまず聞き入るのはアデルの身の上話にかこつけたロチェスターの好色家ぶりだ。階級の差や主従関係を感じさせない彼の「気さくな態度」や「友好的な率直さ」(J.E., 146)がジェインを惹きつけ，「生活 (existence) の空白が埋められた」(J.E., 146)と彼女に感じさせる。退屈なガヴァネス生活が活気を帯びてくるのである。真夜中にロチェスターの部屋で火事が発生し，ジェインが彼の命を救

うというエピソード（第1部15章）をきっかけに、最初は「生活の空白」の補填物であったものが、パーサに関わる秘密を共有する共謀者へと変わる。ただしジェインはパーサについて結婚の儀式執行寸前までなにも知らない。ロチェスターのみが重婚罪を承知でジェインに言い寄り、「じらし」という古風な恋の手練手管を使う。自分へなびくジェインの気持ちを知りながら、しばらくソーンフィールドから姿を消し、やがて上流の紳士淑女を多数引き連れて戻ってくると、数日にも及ぶパーティを催し、ダンスやゲームで時間を潰すとともに、貴族の娘ブランシュ・イングラムとの結婚をジェインに仄めかす。おまけに貴族の女たちはガヴァネスへの軽蔑をだれ憚ることなく口にし、ジェインを打ちのめす。彼女が感じる最も高い階級の壁で、一連の出来事がパリ仕込みのロチェスターによる恋の手練手管であることなど、孤児として育ち、草深い田舎の慈善学校を出ただけのジェインに分かるよしもない。十歳まで世話になったリード夫人危篤の知らせを受けたのを幸いに、ジェインはしばらくソーンフィールドを離れ、ゲイツヘッドへ向かう。一ヶ月の滞在を終えて、別れを告げるつもりでソーンフィールドへ戻ってみると、ジェインを待ち受けているのはロチェスターからの求愛である。感情を弄ばれていると知るジェインは怒りを爆発させる。

「私が機械仕掛けだとでも思っているんですか？感情のない機械だと？せっかく口へ運ぼうとした一口のパンをひったくられ、カップから私の命をつなぐ水を奪われても我慢できる機械だと？私が貧乏で、素性も怪しく、美人でもなく、小柄だからといって、私には魂も心もないと思っ
ていらっしゃるんですか？それは間違いです！私にもあなたと同じだけの魂があり、まったく同じだけの心もあるのです！これでもし神から私にな
にがしかの器量とたくさんの富を授けられていたら、あなたが私から離れ
がたくすることもできたでしょう。ちょうどいま、私があなたから離れが
たく思っているように。私がいまあなたに話しかけているのは、習慣や因
襲という手段によってではないし、死すべき肉体を媒介としてもいません。
私の霊があなたの霊に話しかけているのです、ちょうど二人とも墓へ入っ
た後、神の足下で立っているように。対等なのです、私たちは！」

(J.E., 253)

「自我作り」の重要な契機がここにある。「習慣」「因襲」「肉体」を超越す

ることで、ジェインは階級の壁を乗り越え、「霊」(spirit)の次元で相手と「対等」になる。「制度」に収斂される「習慣」や「因襲」の超越は、これまでもジェインの「自我作り」に欠かせない要素であったが、かねがね自分の「醜さ」を気にしている彼女が「肉体」の超越を示唆するのはこれが初めてである。物語の早い段階でジェインは「肉体」を超越した人物ヘレン・バーンズに出会う。「嘘つき」と罵られ、あげくに立たされているジェインを慰めにやってくるヘレンは次のように言ったのだった。

「あなたの体を創って、そこに生命を吹き込んだ至高の手は、あなたのか弱い自我とは別の、あなたというか弱い被造物とは別の財産をあなたに与えているの。目に見えない世界と霊の王国が、この地球とは別に、人類とも別に、存在するのよ。その世界は私たちの身の周りにあるの。だってそれはどこにでもあるのですもの。そして霊は私たちを見守ってくれているわ。私たちを守るように頼まれているの。もし私たちが軽蔑に打ちひしがれ、憎しみに押しつぶされ、苦痛と屈辱の中で死のうとしていても、天使が私たちの拷問の目撃者となり、私たちの無実を認めてくれるし、(中略)神は私たちにすばらしいご褒美を与えようと、霊が肉体から分離するのをひたすら待っていらっしやるのよ。だとしたら、なぜそんなに失意に打ちひしがれて落ち込まなければいけないの？人生は瞬く間に終わり、死が間違いなくやってきて、幸福と栄光への入口となってくれるというのに」

(J.E., 69-70)

ジェインは最初にこの信仰告白を聞いた時、半信半疑だった。しかし、ロチェスターとの関係が危機的な瞬間を迎えた時、彼女は「霊」の次元での「対等」という観念を信じ、それを口にしたのである。この瞬間からジェインは変わる。彼女にとって「結婚」とは「霊」と「霊」の結びつき以外のものでありえなくなる。そうでなければ彼女とロチェスターの間に「対等」な関係は存在しない。

互いに結婚を約束すると、ロチェスターはジェインをミルコート町へ連れて行き、彼女にドレスや宝石を買い与えようとする。ロチェスターに「結婚」についての原理・原則はなく、単純に「因襲」に従おうとするだけである。彼にしてみれば、結婚相手が高価なドレスや宝石で着飾るのは当たり前のことなのだ。しかし、「肉体」を超越し、「霊」と「霊」の結びつきを考えるジェインにはドレスや宝石などいらぬ。このミルコートでの買い物場面(第2部9

章)はジェインによる結婚「制度」へのささやかな反逆を物語っている。そして結局、重婚を狙ったロチェスターの犯罪は成就せず、ジェインを「情婦」とすることもできない。ジェインが「情婦」になっても、孤児であってみれば、だれに迷惑をかけるものでもないが、彼女は「自分を大切にする」(*I care for myself*) (J.E., 317) という思いで、ロチェスターと別れる。

ジェインが次に「結婚」の問題に直面するのはセント・ジョンに求婚される時である。

「神と自然はきみを宣教師の妻になるように造った。きみに与えられた人格的資質よりも精神的資質がそうになっている。きみは愛でなく勤労向きに造られている。きみは宣教師の妻にならねばならないし、なるだろう。きみはほくのものになる。ほくはきみを要求する。ほくの快樂のためではない。ほくの至高の奉仕のためだ」(J.E., 402)

セント・ジョンはこのように求婚する。「至高の奉仕」にまっしぐらに進もうとする聖職者らしく風変わりな論理であるが、「結婚」が「霊」と「霊」の結びつきであるとすれば、これほど条件の整った求婚はなく、ジェインはそれに説得されそうになる自分を恐れる。金縛りにあったような不思議な体験で、それを彼女は次のように告白している。

「あなたが話している間、私の中で話したり動いたりするものがなにもなくなりました。点灯すべきあかりも、胎動する生命も、相談するか歓声を上げるかする声も、なにも感じないのです。ああ、いまこの瞬間、私の心がどんなにか光の差し込まない穴倉のようになっているかをお見せすることができたらいいのに。その奥では一抹の恐怖が足枷を嵌められて縮こまっています。あなたに説得され、自分で成就できないことに乗り出してしまうのではないかという恐怖なのです！」(J.E., 403)

彼女はセント・ジョンと結婚はできないけれども、「妹」として、「牧師補」としてなら、インドへ同行してもいいと答える。しかし、「二十九の男と十九の女が結婚しないでインドへ行くことなど考えられない」(J.E., 408)として、セント・ジョンはあくまでも結婚を要求するけれども、結局彼の求愛は実らない。ジェインを悩ますのは、聖職者としてのセント・ジョンへの尊敬の念と貴

重なる友情とを失いたくないという気持ちである。だが、彼の求婚には彼女が求める「愛」つまり「人間的愛」がなく、しかも彼にとって「妻」とは「有用な道具」(J.E., 416) にすぎないことをジェインは見抜く。それでも彼女の心は揺れ動き、「愛」でなく「義務」(J.E., 419) として結婚してもかまわないと思いつめるところまで行く。最終的に彼女の決断を促すのは、不思議にも聞こえてきたロチェスターの「声」(J.E., 419) である。超自然現象に解決を委ねた格好だが、ジェインが最終的に選び取るのは「人間的愛」であって「神への奉仕」ではない。ちなみにセント・ジョンは単身インドへ赴き、物語の最後に彼の訃報が届く。「インドへ行ったら三ヶ月も生きられない」(J.E., 415) とセント・ジョンの妹ダイアナは言う。インドでの宣教は過酷な労働として知られていたのである。ジェインにはそのことへの恐れもあったのだった。彼女は結局、「自我作り」の原理として「肉体」の超越を採用できなかったということでもある。

「宗教」の分野でのジェインの「反逆」はブロックルハーストとの面接に始まる。

「邪悪なものが死後にどこへ行くか知っているか？」

「地獄です」というのが私の出来合いの正統的な答えだった。

「で、地獄とはなにかね？説明できるか？」

「炎の燃える穴です」

「で、その穴に落ちて、永遠に焼かれたいか？」

「いいえ」

「それを避けるにはなにをすべきかね？」

私は一瞬考え込んだが、口をついて出てきた答えはあるまじきものだった。

「健康を保って、死なないようにしなければなりません」(J.E., 32)

この面接でジェインは「聖書を読むか」と訊かれ、「黙示録が好きです」(J.E., 33) と答える。セント・ジョンがジェインとの最後の別れを前にして「夕べの朗読」に選ぶのは『黙示録』二十一章で、「されど臆するもの、信ぜぬもの、などなどは、火と硫黄との燃ゆる池にて其の報を受くべし、これ第二の死なり」という部分を故意にゆっくりと読む。ジェインはもはやブロックルハーストの前にいる時のように不信心者ではないし、ヘレン・バーンズの信仰告白

を聞いた時のように懐疑的でもない。彼女にとっての宗教の神髄は「正しいことをすること」(J.E., 419)だと悟っている。「正しいこと」を指し示すのは、ジェインの場合、必ずしも「神」ではない。「超自然の声」はもとを正せばロチェスターであり、十歳の不信心者が長い物語の果てに辿り着くのは言わばロチェスター教だと言える。事実、ロチェスターと婚約した後、ジェインはこう言ったことがある。

「私の未来の夫は私にとって全世界になりつつある。世界以上だ。希望に満ち溢れた天国のようなものだった。ちょうど人間と大きな太陽の間に蝕が挟まるように、私とあらゆる宗教的想念の間に彼が挟まっていた。当時、神の被造物のために、私は神そのものを見失い、被造物を偶像に仕立てていた」(J.E., 274)

この迷妄からジェインが最終的に覚めるかと言えば、そうではなく、むしろ個人的に見つけた「宗教」として、その忠実な信徒になる。それは「人間愛」の「宗教」であるとともに、ジェインなりの解釈によるキリスト教でもあるのだ。宗教「制度」への「反逆」は、こうして、宗教の個人化を生んだのである。

「自我」が統合されるためには「制度」への順応が必要である。ジェインの「自我」はついにこの条件を満たすことがない。彼女の「自我」には亀裂が入っているとする所以である。

「『自我の暗い深淵』に差し込むそのような持続的光線を持つ作品は、未だかつてなかった」というティロットソンの指摘に逆らって、前例を探そうとアーノルド・ケトルによる『イギリス小説序説』(1951)のような文学史の本を繕いみても、それらしいものは容易に見当たらない。しかし、まったくないわけではなく、例えばリチャードソンの『クラリッサ』(1748)がある。これについてケトルは次のように書く。

「登場人物の個人的な感情と秘密の動機を探ることによって、作者が意図していたように思われる単純な感傷的瞬間の喚起とまったく異なるものが達成された。人間の微妙な、行方の定まらない、矛盾した感情の中へ、それまでのどんな作家もできなかったほど深く分け入ったのだ」

(Kettle, I-70)

「感情」は「自我」の一部であり、そこを「探り」、そこへ「分け入る」ことがあるとすれば、『ジェイン・エア』の前例として申し分のない小説ということになるが、しかし、『クラリッサ』は長大な書簡体小説であって、ケトルが指摘しているように、作者の「意図」は「自我」の分析とは別のところにあるので、たとえ「人間の微妙な、行方の定まらない、矛盾した感情」への鋭い踏み込みがあるとしても、それが構造的に自己目的化しているわけではなく、むしろ書簡体の散漫な構造の中に隠れてしまっている。従ってこれを『ジェイン・エア』の前例と見ることはとうていできない。

最も有力な前例はシャーロット・ブロンテの身近なところにあつたと示唆するのは、キャサリン・ティロットソンその人である。妹エミリーの『嵐が丘』(1847)とアンの『アグネス・グレイ』(1847)が刺激になっていたとティロットソンは見る。妹たちから何を学んだのかについても、ティロットソンは詳しく述べているが⁶⁾、それは『アグネス・グレイ』に見られる淡々と真実を語る姿勢であり、あるいはまた『嵐が丘』に見られる暴露(エクスポジション)の技法、情念というテーマに取り組む勇氣、子供時代に経験した抑圧の取り込み、「真実への忠誠」のための詩的想像力の活用などである。

しかし登場人物の「自我」の分析についてはどうだったのかとなると、それについての指摘はない。われわれがすでに見てきたように、『ジェイン・エア』においては、「自我」は主に「本性」(nature)「性格」(character)「生活」(existence)の三側面から多面的に観察されているし、「自我作り」の原則に自由・平等・博愛・正義(「正しいことをすること」)がある。とりわけ「自我作り」における原理・原則の探求に顕著な特色がある。このような「自我」の多面的分析や「自我作り」は、一貫してガヴァネスの「生活」を主題とする『アグネス・グレイ』にも、それが一人称小説であり、自伝的であるがゆえに、ある程度認められる。一方の『嵐が丘』は確かに綿密に「自我」の分析が行われるが、「自我作り」の視点はなく、主に「本性」や「性格」の側面からの分析に終始する。これは語りの構造の限界かも知れない。スラッシュクロス・グレインジの新たな住人となるロックウッドというロンドンから来た人物が、アーンショー家とリントン家の両方に長年仕えてきた使用人エレン・ディーンから聞く両家の物語という構造になっていて、中心人物たちの行状が三人称で語られるからである。このような簡単な比較を通して言えるのは、『ジェイン・エア』においては生き方の原則を模索する「自我作り」が行われ、それが作品の独自な特徴となっているとともに、その歴史的意義につながっているということである。

ある。

4. 『ジュード』——「統合自我」の消滅

4.1 『嵐が丘』と『ジュード』

エミリー・ブロンテの『嵐が丘』という作品は『ジェイン・エア』よりもトマス・ハーディの『ジュード』に近親性を持っている。社会的に作られる「性格」が重要なファクターになっているという共通性があるからである。いったん作られた「性格」は、ほとんどの場合、登場人物が死ぬまで変わらない。逆に言えば、ヒースクリフやキャサリンやジュードは『ジェイン・エア』の主人公のように「自我作り」をしないのである。

まずヒースクリフだが、彼の「自我」は復讐心と一体化している。ミスター・アーンショーが「リヴァプールの街路で拾った」(W.H.=Wuthering Heights, 35) 赤ん坊というのがヒースクリフの出自で、アーンショー家のほかの二人の子供、ヒンドリーとキャサリンとともに育てられるが、その過程でヒンドリーから酷い差別を受ける。

「かわいそうなヒースクリフ！ヒンドリーは彼を浮浪者 (vagabond) と呼び、今後は私たちといっしょに坐ったり食事をしたりさせないと言っている。私にも彼といっしょに遊んではいけないと言い、もしこの命令を破れば彼を家から追い出すと脅す」(W.H., 20)

これはキャサリンが記した日記の一節だが、ここにヒンドリーによるヒースクリフ苛め的一端が覗く。この日記が書かれた当時、すでに彼らの父親ミスター・アーンショーは亡くなり、家督は長男のヒンドリーに相続されている。アーンショー家のすべての権限を握った二十歳そこそこの彼は父親が溺愛したヒースクリフを憎み、家長の権限を濫用して「浮浪者」を家族の一員から召使の地位へ追いやり (W.H., 44)、妹に彼との付き合いを禁じたわけである。

十六歳までのヒースクリフの「性格」形成について語り手エレン・ディーンは次のように分析している。

「まず、その当時までに彼は早期に受けた教育の恵みを失ってしまった。知識追究の面で彼がかつて持っていた好奇心が、若い頃に始まり最近終

わった長年の過酷な労働のために消滅してしまったのだ。先代ミスター・アーンショーの寵愛がもたらした子供の頃の優越感もどこかへ消えていた。勉強の面でキャサリンと対等にやっ払い長いこと努力したけれども、無念さを強く滲ませながら、しかしなにも言わずに諦めてしまった。しかも諦めぶりが徹底していて、その状態では以前のレベルから下へ落ちるしかないと分かっているながら、上を目指してがんばるように彼を諭してもむだだった。精神的劣化は外面的容貌にも顕われ、猫背で歩いたり下品な目つきをする癖を身につけた。生まれつきの引込み思案の性質はばかばかりしいほど過剰に誇張されて非社交的な陰気さとなり、数少ない知り合いの評判を勝ち取るよりも、反感を刺激することに残忍な快感を覚えるようすが、だれの目にも明らかとなったのだった」(W.H., 67-68)

要約すると、早期教育効果と知的好奇心の喪失および優越感と向上心の消滅が、「陰気」で「残忍」など形容できるヒースクリフの「性格」を作っている。これには家長の交替とその背後にある階級「制度」や家長「制度」の問題が絡んでいて、より直接的には紳士候補から召使への格下げと、それに伴うもろもろの不利益がそのような「性格」を作ったと言える。

ヒースクリフは十六歳でワザリング・ハイツ（嵐が丘）から失踪し、三年後に戻ってくる。その間軍隊にいたのではないかと推測され、「背が高く筋肉質でりっぱな体格の男」へと外面的に「変身」(W.H., 95) しているものの、基本的「性格」は変わらず、徐々にヒンドリーへの復讐を果たすし、キャサリンを奪ったエドガー・リントンへの仕返しも忘れないばかりか、世代が代わって、ヒンドリーの息子ヘアトン、キャサリンの娘キャサリン（キャシー）、そして自分自身の息子リントンが結婚できる年齢になっても、依然として執念深く陰謀を巡らすのである。陰謀の目的は、すでに乗っ取っているアーンショー家（ワザリング・ハイツ）とリントン家（スラッシュクロス・グレインジ）の二つの財産を永続的に支配することにある。彼は要するに「成り上がり」の一つのモデルとなるのだが、最後はあっけなく死んで、財産はヘアトンとキャシーの本来的相続人二人のものになることが暗示される。

「制度」への順応どころか、それを悪用する「自我」に統合性など無縁である。ヒースクリフにおいては、「統合自我」は跡形もなく消滅し、代わって「悪」によって統合された、言わば「反・自我」(anti-self) のようなものが提示されている。

キャサリン・アーンショーは「二重性格」(a double character) (W.H., 66)の持主とされる。以下はエレン・ディーンによる分析である。

「リントン家に五週間滞在して以来、キャサリンはリントン家の人たちとの付き合いを続けていた。彼らといっしょにいる時は荒っぽい側面を見せたいという誘惑もなかったし、昔から続く礼儀作法を習った家で無作法に振舞うのは恥ずかしいという感覚もあったので、老リントン夫妻に利発で感じがよいという印象を囫らずも与え、イザベラの感嘆を誘い、その兄[エドガー]の心と魂を奪った。彼女は野心満々だったので、これらの褒美に最初から舞い上がり、その結果として必ずしもだれかを騙そうという意図なしに二重性格を使い分けるようになった。

ヒースクリフはリントン家で『獣にも劣る野蛮なごろつき若造』と毒づいたりもしたが、キャサリンはそんなふうには振舞わないように気をつけた。しかし家では礼儀正しく振舞うと笑われるだけなので、彼女は自分の手におえない本性をむりに抑えるようなつもりはさらさらなく、信用や称賛にありつけるわけもなかった」(W.H., 66)

このように分析される「二重性格」は「本性」に根ざす部分と社会的にできている部分とがある。「自分の手におえない本性」(an unruly nature)はいずれ「狂気」となって顕われる。社会的部分というのは、「二重性格」の巧みな使い分け、二人の男を操ることに関係している。キャサリンはヒースクリフを愛し、「私たちの魂が何でできていようと、彼と私の魂はまったく同じ」(W.H., 80)と考え、ヒースクリフも彼女を愛している一方で、エドガー・リントンが「利発で感じがよい」「礼儀正しい」キャサリンに片思いをしているという関係がある。兄ヒンドリーから差別や侮辱を受けつづけるヒースクリフになんとか助け船を出したいと思い、彼女はエドガーと結婚してヒースクリフの地位を高めてやろうとするのである。「私がリントンと結婚すれば、ヒースクリフの出世を助けてやれるし、兄の影響下から出してあげられるわ」(W.H., 81)と彼女はエレン・ディーンに打ち明ける。エレンに言わせれば「最悪の動機」(W.H., 81)だが、キャサリンは「ベスト」(W.H., 81)と言い張り、計画の実行にかかる。しかし、彼女の決断と期を一にしてヒースクリフが失踪し、彼女は「狂気」の兆候を示しはじめる。加えて、エドガーの両親が相次いで死ぬため、実際の結婚は決断から三年後になる。「狂気」は結婚後に本格化するの

だが、それには彼女の計算違いも原因になっている。結婚、ヒースクリフの帰還、密会という出来事後、エドガーは当然のことながら妻キャサリンに密会を禁じ、監禁状態に置く。「ジェイン・エア」におけるパーサを想起させる場面だが、ヒースクリフに会えなくなることがキャサリンの計算違いであり、「狂気」の原因となるのである。彼女は狂い死にし、死後二時間後に娘キャシーが生まれる(W.H., 164)。キャシーは物語の後半で主役の一人となるが、「狂気」が遺伝しているようすは見られない。

「狂気の自我」も「反=自我」にはほかならないが、ヒースクリフの場合と同様、キャサリンの「自我」も、そのもの自体に上品と野卑が混在して分裂組みであるのに加え、階級「制度」の現実の中で引き裂かれている側面がある。このような「自我」はもはや統合不能なのであり、「悪」へ転落するか、「狂気」へ陥るか、どちらかしかない。それが少なくとも『嵐が丘』におけるエミリー・ブロンテの観察である。しかし、それがなんらかの社会現象の表象だということはどこにも示唆されていず、せいぜいイギリス北部の人間に潜む不気味な要素の抽出ということに留まっただけで、その点が『ジュード』に見られる「世代」表象性、つまりジュードはある「世代」の表象だというトマス・ハーディの観察と大きく異なる点である。

4.2 ジュードの「宿命」

「性格」によって固定された「自我」を与えられ、階級「制度」の現実の中でヒースクリフやキャサリンと同じようにもがきながらも、「悪」や「狂気」へ赴くことなく、第三の道としてひたすら「絶望」するのが『ジュード』⁷⁾の主人公である。しかし、この作品に「自我作り」の要素がないわけではない。むしろ、主人公が「信仰」を失うという注目すべき展開が見られる。これが重要なのは「統合自我」の消滅には「信仰」の問題が密接に関係しているからである⁸⁾。

ジュード・フォーリーの「自我作り」は一貫して、つまり十一歳から死ぬまで、自分は無用な人間だという宿命論の受容に基づいている。十一歳の孤児ジュードはトウモロコシ畑のカラス追いという低賃金の臨時仕事に従事するが、カラスが追い払えずに雇主の農夫トゥルーサムに解雇される。仕事を斡旋した叔母ドゥルシラ・フォーリーは「鳥も追えないなんて、おまえにはいったいなにができるの？」(Hardy, 16)と叱り、「信用を落とされた」(demeaning her) (Hardy, 16)として腹を立てた上に、「かわいそうな役立たずの子供」(poor

or'nary child) (Hardy, 16) と呼び、「おまえの側の家族には、まるでやる気 (sprawl) というものがなかったけど、これからだってだめだろうね！」(Hardy, 16) と嘆く。これを聞く時、ジュードは叔母がふと口にする「クライストミンスター」(オックスフォードのこと) という町に興味を示すだけで、特に反発もしない。

「ジュードは外へ出て、無用な人間としての自分の存在 (his existence to be an undemanded one) をこれまで以上に感じながら、豚小屋近くの藁の山に仰向けに寝た」(Hardy, 16)

物語が始まって最初のこの「自我」表現では、その不変的な位相として「宿命」という言葉が想起されるなにかが措定される。事実、「宿命のジュード」(the predestinate Jude) (Hardy, 38) という表現が後に使われるのである。

「無用の人間」ではあっても、彼は「本に狂っていて」(Hardy, 13)、クライストミンスターへの憧憬がある。「学問と宗教のすばらしい町」(Hardy, 24) へいつか行きたいと思っている。「ブラウン・ハウス」と土地の人たちが呼ぶ建物のところから、その町がかすかに見えるということで、ジュードはしばしばそこへ出かけ、憧憬を増幅させる。いつかクライストミンスターへ行ける時に備え、ラテン語とギリシャ語の勉強も始める。この憧憬は彼の「自我作り」に欠かせない要素で、彼の価値観の基礎でもある。この価値観に照らし、自分に価値がないと判断する時、彼は「この世から出て行きたい」(Hardy, 27) と思うのだ。

メアリー・グリーンでペイカリーを営む叔母ドゥルシラの手伝いを十六歳までして、その後フリーストーン石工の修行をアルフレッドストーンで積むことになるが、その間寸暇を惜しんでギリシャ語とラテン語の勉強を続け、かなり上達する。この段階での彼の「自我作り」の明細は石工の技能に加え、古典語の知識、『イリアッド』の中の二巻読破、ヘシオドスとツキデュデス少々、ギリシャ語の聖書の大部分読破、ユークリッド幾何学と代数の初歩習得、ローマ史とイギリス史の知識などである。このような「自我」の中身はシャーロット・ブロンテであれば「生活」(existence) に属していると分類するかも知れない。

十九歳になった時、彼はいよいよクライストミンスターへ行つて、石工の腕を磨きながらさらに勉強を続けようと決意する。ここまでの彼には「生活にかかわる自我」しかない。彼の本格的転落が始まるのは、呪われた宿命的自我が

顕在化する時である。彼の場合、女への「動物的情念」が人生を狂わせる。

クライストミンスターへ行く決意した矢先、彼の前に現われるアラベラ・ドンは異性の最初の代表ということになるが、彼女は彼の価値観を変えてしまう。彼女との最初のデートの後、ジュードは次のように考えながら徒歩での帰途につく。

「彼は自分が昨日までの自分とは別人になったように感じながら歩いた。彼にとって書物の数々はなんだったのか？ 毎日毎日、一分の時間も浪費しないようにと、これまで必死にしがみついていた意図はなんだったのか？ 『浪費』だって！ 浪費かどうかを決めるのは、ものの見方しだいだ。彼は生まれて初めて、ただ単に生きるということをしていて、人生を浪費しているわけではなかった。大学を卒業したり、聖職者になったり、あるいは、そう、法王になんかなるよりも、女を愛するほうがまだ」 (Hardy, 41)

彼は自分を突き動かす「感情」を自覚したわけである。豚のペニスを取り持つ縁 (Hardy, 33) で始まるアラベラとジュードの付き合いは、最初から「動物的情念」(Hardy, 75) に支配されていることを暗示する。実際、彼女が自分の胸に手を突っ込んで取り出すコーチン鶏卵 (Hardy, 47) を合図に、早々に性的な関係となり、さらには神の前での正式な結婚 (Hardy, 48) となる。この段階でのジュードはまだ懐疑に目覚めず、無邪気に神(あるいは宗教「制度」)を信じている。この無邪気さは、裏返せば結婚「制度」の制約力についての無知であり、「動物的情念」の支配から最後まで抜け出せないジュードにとっては致命的な過ちとなる。「動物的情念」は「制度」と調和しないからである。

十九歳までに「生活」の面で築いた「上昇志向」が「動物的情念」で掻き消されてしまうわけではなく、その面での価値観からアラベラを見る時、アラベラへの不満が芽生える。

「アラベラが女という種族の見本としてあまり価値がないことを、彼は頭の密かな内奥で分かりすぎるほど分かっていた」 (Hardy, 48)

彼らの結婚は最初からうまく行かない。それには社会的要因も確かに加わっている。石工徒弟としてのジュードの賃金では生活できないからだ。そこでアラベラは豚の飼育を始める。その豚を殺して処理する段になって、生活者とし

てのジュードの無能さが露呈する。彼は鳥が追えなかったように、豚も殺せない。これに対し、アラベラは逞しい生活者で、豚の処理はもとより巧みな上に、夫を引き止めるためには子供ができたと嘘もつく。アラベラが豚の臓物で汚れた手でジュードの本をばらばらに床へ放り投げる時、二人の対立は頂点に達する。

ジュードは別離の直前に叔母を訪ね、「フォーリー家のものは結婚に向かない」(Hardy, 59)という「宿命」を知り、「絶望」して、氷の張り詰めた丸い池の上へ歩み出し、自殺を試みるが、氷が割れずに自殺もできない。「自殺するだけの十分な威厳すらない人間なのだ」(Hardy, 59)と彼は思う。

彼らは別れる決意を固め、しかし離婚の手続きという法的決着をつけないまま、ジュードはクライストミンスターへ、そしてアラベラはオーストラリアへと向かう。

アラベラとの別離の後、ジュードは憧れのクライストミンスターへ移り、もう一度「学問」への情熱を燃やそうとする。しかし、またしても別の「女」が現れて彼の「生活」を狂わせ、転落への「宿命」を辿らされることになる。スザンナ(スー)・ブライトヘッドはジュードにとって「宿命の女」以外のなにものでもない。彼女はあまり「美しい」わけではないが、ロンドンとクライストミンスターでの長年の生活で洗練されたモダンで都会的な女で、しかもアラベラになかった豊富な知識もある。七歳年上のいとこであるにも関わらず(あるいは、そうであるがゆえに近づきになれて)、ジュードはそういうスザンナの虜になる。彼女は知性と都会性ばかりでなく、異端の信仰をも持ち合わせている。古典古代の神々を信じる彼女の異端信仰は初期キリスト教時代の偶像類製造販売店勤務という仕事を奪うことにもなるばかりでなく、クライストミンスターで聖職者を夢見ていたジュードの無邪気な信仰心を揺さぶり、背信への原因を作るのである。

スザンナの失業は物語の中で思わぬ展開を呼ぶ。フィロットソンという、すでに四十五歳になった人物の登場である。この人物は十年前までメアリーグリーン村で学校教師をしていて、ジュードは彼の教え子の一人である。学位をとるためにクライストミンスターへ出かけ、ジュードにギリシャ語とラテン語の教科書を送ってやったこともあるが、結局学位は取れず、学校教師を続けている。このフィロットソンにジュードはスザンナを紹介し、失業した彼女のために学校教師の口はないかどうかと尋ねるのであるが、その結果は社会的に無邪気で無知なジュードの予想を越えている。フィロットソンは持てる社会的

影響力を駆使してスザンナに言い寄り、十八歳ほど年上であるにもかかわらず、条件付きの求婚をするに至る。

こういう思わぬ展開の中で動揺したジュードは、いつものように人生指南役の叔母を訪ねる。この叔母は既製「制度」の象徴であるがゆえに、ジュードを導くことができるのである。「あの娘が都会的な気まぐれ女になっていれば、おまえの破滅をもたらすだけだね」(Hardy, 90) と叔母はまたしてもジュードの「宿命」を予言する。そしてこの予言は的中するのである。

スザンナに去られた上に、学問の「コーチ」(Hardy, 92) を頼もうとした大学からも冷たくあしらわれ、ジュードは絶望する。しかし、今回は自殺を試さず、酒場で二、三杯飲んで酔っ払い、アルコールで気分を紛らす悪癖の最初の一步を踏み出す。そして、オックスフォードの有名な交差点カーファックスをモデルにした「フォーウェイズ」に立ち尽くし、警官に話しかけたりしながら街を眺め、「自我作り」の上で重要な原理を発見することとなる。

「タウン・ライフ (街の生活) はガウン・ライフ (大学生生活) よりもはるかにずっと脈動的で多様で分かりやすい人間性の教科書だということが、彼には分かりはじめた。彼の目の前で右往左往するこれらの人たちこそ、例え彼らがキリストやミンスター (大寺院) のことを知らなくても、クライストミンスターの現実なのだ。それがものごとの本質の一つだ。学生と教授からなる浮動人口は、キリストやミンスターがなんであるかを二つとも確かに知っているかも知れないが、地元の意味では、まったくクライストミンスターに関係がないのだ」(Hardy, 96)

この覚醒の後、彼は公会堂での「プロムナードコンサート」(観客が自由に動き回れるコンサート) へ入って行き、会場のようすを観察する。

「会場は若い男女の店員や兵士、徒弟やたばこを吸う十一歳の少年たち、玄人よりはましな素人集団の浮気女たちでいっぱいだった。楽団は演奏を続け、群衆は押し合い圧し合いしながら歩き回り、時折男がステージへ上がってコミックソングを歌った」(Hardy, 96-97)

彼はこの集団への帰属を決意する。連日のように「暗く (obsucure) 天井の低い酒場」(Hardy, 97) へ出かけ、「自分は心底悪い性格で、なにかを期待

してもむだなのだ」(Hardy, 97)と確信する。『ユリシーズ』第十五挿話に似ていなくもないこの場面で、教会関係鉄器商人、競売屋、ゴシック建築専門石工、事務員、ガウンと白衣(サープリス)製造業手伝い、怪しげな女、競馬狂の男、旅芸人、忍びの学部生などを前に、ジュードは『使徒信経』の一節をラテン語で朗誦して見せる。

「社会的成功などもうまったく気にしない」(Hardy, 102)という心境に達したジュードはある種の集団の表象的役割を演じはじめる。「目下の段階で同じような自我探究(self-seeking)の道を行く若者たちが何千人もいる」(Hardy, 103)という作者のコメントがあることから、彼の役割は明らかである。ジュードは自分の宿命的所属先である労働者階級への精神的帰属を決めてアンチヒーローとなったということだ。このまま落ち着けば、時たま酒場でラテン語を怒鳴る不信心で飲んだくれの石工として、それなりに統合された「自我」を抱えて生きて行けるだろう。アラベラとの「動物的情念」からの結婚はもともと彼にそのような人生を約束したはずだったし、事実アラベラは一人そのような生き方をしていく。彼女はオーストラリアのシドニーでホテルマネージャーと結婚し、その後イギリスへ戻り、ロンドンのランベスでパブを経営しているのだが、経営は順調で、「環境」(Hardy, 154)は改善され、「品のいい生活」(a genteel life) (Hardy, 154)を送っていることが分かる。「統合自我」なしに「品のいい生活」は送れない。

しかし、ドゥルシラ叔母が予言したように、ジュードを待っているのは破滅である。その破滅の介添え役はスザンナだ。この「気まぐれ女」は予測のつかない行動でジュードの前に出没し続ける。

姿を消したはずのスザンナから手紙が来て、ジュードの落ち着きを失わせる。彼女はメルチェスターの教員養成学校の学生になっていて、二年間で修了した後フィロットソンと結婚する約束になっているという。ジュードはメルチェスターへ駆けつけてスザンナと会い、付き合いを再び始めるが、この付き合いは長く続かない。スザンナは寮の規則を破って放校になり、さらにジュードが法的に結婚していることを告白すると、彼女はフィロットソンのところへ戻って、予定よりも早く結婚してしまう。しかし、話はここで終わらない。

スザンナはフィロットソンとベッドを共にしないまま暮らし、「結婚すべきでなかった」(Hardy, 153)と後悔する。「私は実際にはリチャード・フィロットソン夫人ではなく、常軌を逸した情念と説明不能な反感にずっと翻弄されてきた女なの」(Hardy, 163)と自己規定し、「私はりっぱになりたいと思わな

い」(Hardy, 179) と言い残してフィロットソンのもとを去り、ジュードのところへ戻るのである。

二人とも法的に別人と結婚していながら、社会に背を向けての生活が始まる。それまでのタブーを破り、初めて肉体的に結合するとともに、オールドブリッカム（モデルはレディング）で同棲生活を始める。やがて彼らはそれぞれの法的結婚を解消する手続きを取り、いつでも結婚できる態勢になるが、結局、法的手続きは取らずじまいとなる。

「ジュード、あなたはどうしても法律で私との関係を決めなければ、いまと同じくらいに幸福になれないと思うの？ 私たちの家系の人間は男も女もすべてが自分たちの善意に左右されるような時にはとても寛大なのに、強制力が働くといつも反発するのね。法的義務から知らず知らず生じる態度があなたは恐くないの？ 情念の本質って感謝の念にあるのに、その情念を壊すことになると思わないの？」(Hardy, 215)

スザンナのこの、結婚を制定された「制度」から「情念」の問題へ還元する理屈に、彼女の「自我作り」の原則が窺われ、その影響の下にジュードは法的手続きなしの同棲で満足することになる。こういう個人的解釈による結婚は、スザンナの異端の宗教と同様、社会の中の「行動管轄のための支配システム」と軋轢を起こす。子供が二人でき、おまけにジュードとアラベラの間にできていたという九歳の子供リトル・ファーザー・タイムまで育てることとなるが、法的手続きを無視する彼らの態度は反社会的と見なされ、石工としてのジュードの注文仕事が減ってしまう。貧困の生活はリトル・ファーザー・タイムに「生まれて来なければよかった」という思いを強く抱かせ、やがて彼は小さな子供たちを殺し、自分は首吊り自殺をするのである。

物語の悲劇的展開の後、スザンナはジュードと別れ、フィロットソンと再婚する。今度は寝室もともにする通常の結婚となる。「歯を食いしばって」(Hardy, 316) フィロットソンの肉体を受け容れるのだ。つまり彼女は「制度」と妥協するのである。

一方、ジュードもまたアラベラと再婚する。これはジュードの労働者階級への精神的帰属を再確認する象徴的行為となるはずなのだが、しかしその時までには「下降」する振り子は落ちるところまで落ちていて、再婚が彼の再生につながる。仕事も信仰も失い、病魔に襲われて死ぬ時をまつだけとなる。そ

れでも彼はアラベラに次のように言うのである。

「肺炎で部屋から出られなくなった男にとって、この世に残されている願いは二つしかない。特別な女に会って、それから死ぬことだ」

(Hardy, 311)

この願いをスザンナにむりやり会うことで自ら叫べた後、ジュードは死ぬ。「動物的情念」への殉死であるとともに、「不要な人間」という自意識に基づく自殺でもある。信仰を捨てての死は、生きるためになんらかの形でなされなければならない「自我作り」の破産であり、そこに「統合自我」は跡形もなく消えている。

注

- (1) 拙論「サルマン・ルシュティの『複合自我』論について」(『筑波英学展望』第20号)において「社会的自我」に関し若干の考察を行っている。
- (2) Beaty, 176-177参照。
- (3) Beaty, 193参照。
- (4) Brown, 57参照。
- (5) Mead, 147参照。
- (6) ティロットソンは妹たちの影響について次のように述べている。

「アンの気取らない、それでいて力強い語りは、シャーロットに作家自身の経験に近い一人称の視点という可能性を示したかも知れない。他人の家という馴染みのない、居心地の悪い世界で、鋭い観察力を示し、ストイックに生きる孤独なガヴァネスの視点である。アンの物語の心情的駆動力は単純かつ単一で、過去と未来の双方へ向けられた郷愁だ。脇役の登場人物たちがこのことに貢献し、また(リード家のものたちやアデルのように)子供養育にかかわる副次的モラルを提供する。ミステリーや葛藤はいっさいなく、サスペンスもほとんどない。深みのない直線的物語だ。しかし散漫な物語ではなく、その直線は環境と感情にかかわるほんものの自立的世界、時には『ワイルドフィールド・ホールの住人』における激しい恐怖を暗示する世界を、くっきりと描いている。『ジェイン・エア』にたいしての『アグネス・グレイ』の貢献は、おそらく、単純かつ誠実に形式と内容を調節する勇気を与えたことだと思われる。それに『アグネス・グレイ』に見られる淡々と真実を語る姿勢はアングリアへの歓迎すべき解毒剤だった。

一方、『嵐が丘』の貢献は、情念というテーマに取り組む勇気を与え、構成の入念さに関してもなにかの示唆を与えたことであつたかも知れない。おそらく『嵐が丘』が与えた最も有益な教訓は、そこに採用されている暴露(エクスポジション)の技法で

あったのではないか。シャーロットは『ジェイン・エア』以前にその技法を使ったことがないが、その技法は満足すべき複雑さの達成に役立つ。目下のミステリーが過去の暴露によって徐々に明らかにされるからである。確かに『ジェイン・エア』では過去の暴露は主として回想によってなされるのに対し、『嵐が丘』では共通の観察者によって二つか三つのレベルの時間が披瀝されている。しかし、二つの小説はどちらも、背後で、年代記的時間に細心の注意を払って構想されたはずである。その種の散文的構想は議論されてもまったくおかしくないことがらだと考えられる。さらに、エミリーのもっと大きな目的の一つが、達成のしかたは異なるけれども、『ジェイン・エア』に反映されている。つまり、子供時代に経験した抑圧を、巧みに工夫された再現や対照によって、成人した登場人物にも体験させるという目的である。二つの小説における登場人物の葛藤は比較することができない。というのも、幻視者であるエミリーはモラルの世界を迂回し、子供時代の愛と憎しみのジャングルから直接立ち上がって精霊の世界へと赴き、両者を一つのものに見なすからである。背景も土地や季節の感覚も同じではない。しかし、二つの作品には同じ「五感の昂揚」があって、『教授』においてはその欠如が目立っていたのだ。真実への忠誠のためには詩的想像力を拒む必要はないということを、『嵐が丘』はシャーロットに教えたのかも知れない」(Tillotson, 288-290)

この引用にはひとつだけ注釈が必要だと思われる。「[「アグネス・グレイ」]に見られる淡々と真実を語る姿勢はアングリヤへの歓迎すべき解毒剤だった」とティロットソンは書いている。「アングリヤ」とは言うまでもなく「アングリヤ物語」と総称されているシャーロットの初期作品のことである。弟ブランウェルを加えたブロンテ家の四人の子供たちには物語を創り合う習慣があり、シャーロットが十三歳のころ(1829)にグラスタウン国を舞台とする一連の物語が始まったが、やがてもっぱら弟との連携のもとに一八三三年ごろからアングリヤ王国を舞台とする物語へと移行する。この一連の「アングリヤ物語」でシャーロットが好んで描いたザモーナ公爵はバイロンのチャイルド・ハロルドをモデルとした好色家であるとともに二重人格や悪魔的傾向も指摘され(岩上, 115-121)、『ジェイン・エア』におけるエドワード・ロチェスターの造型に影を落としている。しかしそれはなにゆえに「毒」であり、それに対する「解毒剤」が必要であったのか。ティロットソンは次のように説明している。

「一八三〇年から一八四〇年にかけて書かれた膨大なロマンス群はシャーロット・ブロンテの小説諸作品の暗い後背地、あるいはそれらが形成されるカオスとして残っている。それは二つの意味でカオスなのである。それらはまさに共同作業の白日夢から生み出されたものなので、説明が必要になることはなにもなかった。一つ一つの作品はそれ以前のすべての作品に通じていることばかりでなく、もっぱら雑談や孤独な空想から「虚構された」多くのことがらについての知識をも想定していた。不定形の塊が膨れ上がり、はびこるにつれ、『外部の』読者を考えることなどできなくなり、構成に関する大問題や興味をつなぐという、要するにコミュニケーションにかかわる微妙な問題などには決

して直面することがなかった。アングリア物語にはひとつとして、なにがあらうと作家がきちんと統御してくれているという静かな自信をもちつつ読めるものがない。その上、アングリアの世界はモラルの面でカオスになっている。ヒーローたち、特に圧倒的なザモーナ公爵は、バイロンの罪意識すらないバイロンの人物だが、情念、復讐、残酷、狂気に苦しみ、その言辞は熱っぽく耳障りだ。その巨大さと歪みゆえに、アングリアはその主要な作者〔訳注・シャーロット・ブロンテのこと〕がやがて気づくように、芸術と人生双方の主張にとって危険だった。フランケンシュタイン的怪物になっていたのだ。しかし、それは征服されるべきであって、そこから逃げ出してはいけないうしろものだった」(Tillotson, 270-271)

- (7) 正式のタイトルは *Jude the Obscure* であり、この *the Obscure* がなにを意味するのかが読者の気になるところである。離婚の法的手続きについてスーと話している時、ジュードは次のように言う。

「ひとつだけ確かなのは、裁判所の決定がどう出されようと、結婚は壊れた時に解消されるんだ。おれたちみたいな貧乏で *obscure* なものたちにはこういう利点がある。つまり、おれたちの場合こういうことは大雑把な出来合いのやり方で処理するってことさ」(Hardy, 204)

もちろんこの文脈での *obscure* が *Oxford English Dictionary (OED)* 当該項目第六項 b に当たることに紛れはない。問題は第六項 b “Of person, their station, descent, etc.: Not illustrious or noted; unknown to fame; humble, lowly, mean” の中のどの意味を採用するかである。おそらく最後のグループの「身分の卑しい」という意味だろうと推測できる。しかし、この同じ単語が別の文脈で出てくる時は、別の意味になる。ジュードとスーがオールドブリッカムの町から姿を消したことを伝える次のような一節がある。

「彼らがどこへ行ったか、だれも知らない。だれも知ろうとしていないことが主な理由だ。そのような *obscure* な男女の尾取りを辿ろうという奇特な好奇心の持主ならば、男の適応性のある技能を利用して、ほとんど遊動民のような移動生活へ入ったのだと知るのに、それほど手間はかからないだろう。その種の生活はそれなりにしばらくは楽しみがないわけではなかった」(Hardy, 244-245)

ここでの *obscure* は *OED* 第六項 b の第一グループ「名もない」に当たるだろう。つまりは、「名もない、身分の卑しいジュード」というのがタイトルの意味だと分かる。「身分の卑しい」ものが「ヒーロー」に選ばれているところに、この小説の歴史的意義がある。それまでにどの作家がこういう「身分の卑しい」、しかも社会的に上昇できない人

物を「ヒーロー」にしたいだろうか。確かにヒースクリフやディケンズの「ヒーロー」たちがいるが、彼らはいたい、長じて「成り上がり」になる。上昇できないジュードは二十世紀に豊富なアンチ・ヒーローの魁と言うべきかもしれない。

(8) この点については Daiches (1969) から重要な示唆を受けた。

References (本文中のカッコ内数字は該当書のページを示す)

- Austen, J. *Emma*. Penguin, 1996.
- Beatty, J. *Misreading Jane Eyre*. Ohio State University Press, 1996.
- Brontë, A. *Agnes Grey*. Oxford University Press, 1998.
- Brontë, C. *Jane Eyre*. Oxford University Press, 2000.
The Professor. Oxford University Press, 1991.
- Brontë, E. *Wuthering Heights*. Oxford University Press, 1995.
- Daiches, D. *Some Late Victorian Attitudes*. André Deutsch, 1969.
- Greenblatt, S. *Renaissance Self-Fashioning*. The University of Chicago Press, 1984.
- Hardy, T. *Jude the Obscure*. W.W. Norton, 1978.
- Kettle, A. *An Introduction to the English Novel*. 2 vols. Hutchinson University Library, 1961.
- Mead, G. H., Reck, A. J., ed. *Selected Writings*. The University of Chicago Press, 1964.
- Richardson, S. *Clarissa*. Penguin, 1985.
- Sumner, W. G. *Folkways*. Ayer Company, 1992.
- Tillotson, K. *Novels of the Eighteen-Forties*. Oxford University Press, 1961.
- 岩上はる子『ブロンテ初期作品の世界』(開文社出版, 1998)